

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	復古編の上正下譌における正誤規準と元代の増補版での準拠状況
Author(s)	鈴木, 俊哉
Citation	広島大学大学院人間社会科学研究科紀要. 総合科学研究, 2 : 53 - 82
Issue Date	2021-12-31
DOI	
Self DOI	10.15027/52025
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00052025
Right	掲載された論文, 研究ノート, 要旨などの出版権・著作権は広島大学大学院人間社会科学研究科に帰属する。©2021 Graduate School of Humanities and Social Sciences, Hiroshima University. All rights reserved.
Relation	



復古編の上正下譌における正誤規準と 元代の増補版での準拠状況

鈴木 俊哉

広島大学総合科学部、広島大学情報メディア教育研究センター

Seal Glyph “Correctness” Definition in Fugubian and the Conformances in the Extended Versions in the Yuan Dynasty

SUZUKI Toshiya

School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University
Information Media Center, Hiroshima University

あらまし

北宋・張有の『復古編』には「形相類」「筆迹小異」「上正下譌」などの小篆に対する一種の字様書的な附録が含まれている。宋元代の、説文以外の篆文研究における字形の正誤規準を調べるため、本稿では予備調査として上正下譌の正誤規準と大徐本の六書情報を比較し、また、元末明初の増補版がその正誤規準を満たしているかを調査した。その結果、復古編の上正下譌の20%程度は大徐本の小篆字形とは異なるが、大徐本の六書情報には準拠しており、この六書情報に基づいた規準は増補版にも受け継がれていることが判った。ただし、『増修復古編』は大徐本とも復古編とも異なる規準も含むと思われる。

Abstract

“Fugubian” (FGB) by Zhang You in the Northern Song Dynasty had several useful appendixes for “similar-but-different characters,” “acceptable glyphic variations,” and “correct and wrong glyph shapes.” For the studies on the Seal glyph “correctness” out of the field of Shuowen Jiezi (SWJZ) studies, a preliminary study is conducted for the “correct and wrong glyph shapes” and the conformances in the extended versions of the FGB in the Yuan dynasty. Most parts of the glyph correctness definitions in the original FGB were found to be justifiable by the glyph structure definitions in the DaXu version of SWJZ, although 20% of them are incompatible with the representative glyph in the DaXu version of SWJZ. The extended versions of FGB conform to the correctness defined by the original FGB, but Zengxiu Fugubian is

supposed to be using another correctness definition that differs from the original FGB and the DaXu version of SWJZ.

1. 復古編とは

北宋初期の徐鉉による『説文解字』（以下、説文¹）の校訂、いわゆる大徐本の成立によって、北宋の公式な文字学は勅命で編まれた大徐本に一本化されたように感ぜられる。しかし、北宋の新法運動の中で王安石は大半の漢字を会意で説明する『字説』を編み、これが科挙の採点基準に採用されたために王安石の在任中は大徐本と整合しない文字学が通行したと考えられている（黄建榮2001, 陳侶佐2019, 2020）。北宋の張有による『復古編』は、王安石の辞職後、文字学を説文に基づくものに復旧するために編まれたものと考えられている（邱永祺2011, 王珏2020）。

大徐本が11108字²の字書であるのに対し、復古編は本編1240字³、附録1413字というごく小規模なもので、説文を置き換えることはできない。しかし、宋末元初の吾丘衍による篆刻理論書『學古編』は大徐本と並んで復古編を取り上げている。説文は基本的に正しい字形⁴のみ示し、誤字・通用字

形は殆ど示さないが、復古編は「形相類」「筆迹小異」「上正下譌」などの附録により、字体が似ている別字、同字で許容される字形差、誤字となる字形差を示して利便性を高めたことが篆刻理論における評価につながったと見られる。

2. 元代の復古編の展開

元代には復古編を増補したものが多数編まれ、現在残るものに元・呉均の『増修復古編』と元・曹本の『續復古編』がある。たとえば胡樸安1937では「呉氏之書、頗不謹嚴。如全字之類、引及道書、則其取材極不可靠也。……曹氏之書、體例悉照張有、張書二千七百六十一字、曹書六千四十九字、其比張書爲擴大、……」のように評しており、一般には増修復古編の評価が低く、續復古編の評価が高い。

2.1 増修復古編とその版本・写本

増修復古編は明初の刻本が四庫全書事業の中で収集されたが、四庫全書総目提要（以下、四庫提要）は「其濫者如全字之類。引及道書。又蕪雜而不盡確。所分六書。尤多舛誤。如艘字爲國名。孫字爲人姓。……」のように説解の品質に問題があると⁵、評価は低い。そのため、四庫全書の中でも複製されていない。

現存する資料は、明初刻本⁶と呉騫旧蔵写本

定に踏み込むので、大半を字形の違いと表現している。

⁵ 胡樸安1937の増修復古編の評価はこの四庫提要から来ていると思われる。鈴木2021aでは四庫提要が批判しているもののうち、「全」が増修復古編に見えないとしているが、これは類型字の「全」を見落としたものである。お詫びして訂正したい。ただし、この字について道書を引いて解説するのは復古編も同様であり、四庫提要が増修復古編特有の点として批判するのは当たらないという結論は同じである。

⁶ 繆荃孫跋本と、汪啓淑・鉄琴銅劍樓旧蔵本で、同

¹ 本稿では固有名詞と引用文以外は基本的にはJIS X 0208範囲内の新字体に改める。また、書名については初出時のみ『』で囲う。ただし、説文小篆を指示するための漢字はISO/IEC 10646: 2017までのものを用い、これでも符号化されていない場合はISO/IEC 10646が定義するIdeographic Description Sequenceを用いる。小篆の部分図形を示すために本題IDSで用いるべきでない文字（ローマ字など）を用いる場合がある。

² 海源閣旧蔵本および陸心源旧蔵本の字数。汲古閣本通行本は11115字を収める。

³ 影宋本では1239字、元刊本では1240字である（王珏2020, 鈴木2021a）。また、續復古編の序文で曹本は復古編の収字数を「上下卷十二類二千七百六十一字」としており、影宋本・元刊本よりも多いことを王珏2020が指摘している。

⁴ 本稿では、説文の見出し字として別義のものになってしまう場合には字体が異なるとし、そのような紛れが発生しない程度の文字図形の違いは字形が異なるとする。ただし、復古編の上正下譌では1つの文字の総体としての議論ではなく、図形部品の同

1点が知られる。本来上下巻から成っていたものと思われるが、現存する資料はどれも上巻のみである。四庫提要は汪啓淑旧蔵明初刻本に基づいて書かれ、凡例や注記の中で黄氏韻會を引く部分があることを根拠に成立を元代と考えている。序文には年記が無いが、引かれる文献には洪武11年に成立した『六書本義』が見えるので、明初刻本であることは間違いない。繆荃孫本が含む序文に重刊を思わせる記述が見えないところからすると、成立は元代であったとしても印行は明代と考えて良いであろう。

2.2 續復古編とその写本・版本

續復古編は四庫全書事業の中では複製されなかったが⁷、阮元が四庫未収書提要で潘未家に伝わる旧抄本を紹介したことから、姚覲元が阮元写本・潘氏旧蔵本・陸心源旧蔵本を校合して翻刻本を出版した⁸。續修四庫全書提要は説解の詳細には立ち入らず、経籍に見えるが説文に見えない文字を追加したことを評価する⁹。これより古い資料としては趙宦光旧蔵写本が現存する。

續復古編は元・至正年間成立であることは序文に見えるが¹⁰、元刊本・明刊本は伝わらない。趙宦光旧蔵写本・陸心源旧蔵写本・阮元写本を比較すると、3本とも上平声・下平声・上声・去声部末に「逢字起至蠻字共七十六字盧熊字公武所増」のような注記があり、盧熊（慮公武）による増補を受けて

版と思われる。

⁷ 本稿で調べた限り、『四庫採進書目』には續復古編は見えないので、事業の中で収集されなかったために複製もされなかったと思われる。

⁸ この3写本の流伝については朱生玉2020に整理されている。

⁹ 續修四庫全書提要は「正今書之譌謬。許書注敘所載而諸部不見者。經典所有説文不録者。審知漏略。悉攷證而殫集焉。」とする（經部小學類, p.1173）。曹本の自序にはほぼ同じ文言が見える。また、新伸銘が寄せた序にも「古文湮滅久矣。惟許慎説文十五篇僅存世遵信。然其中間有遺脱。如劉免之類。」とある。ただし、劉・免の2字が説文に欠けていることは小徐本卷39疑義篇で既に指摘されている。

¹⁰ 冒頭序文の年記は至正12年（1352）、後序の年記は至正15年（1355）である。

いることが判る。しかし、續復古編に附された序文の中にはこの増補について触れたものは見えないので、現存する續復古編は増補が書き込まれた写本からの影写の可能性が疑われる¹¹。ただし、盧熊は元末明初の人物であるから、元代に増補された写本に由来すると考えても無理は無い。

2.3 増修復古編・續復古編の違い

鈴木2021aは、増修復古編と續復古編の本編見出し字について、復古編の本編見出し字との重なり数を調査した。その結果では、復古編本編1240字に対し、増修復古編は1021字が重なるが、續復古編は179字しか重なっていない。従って、増修復古編は単体での利用を考えているが、續復古編は単体ではなく、復古編との併用を想定した可能性がある。増修復古編・續復古編は常に復古編に従うのではなく、大徐本に従う場合もあることが既に判っているが¹²、復古編との併用を想定したのであれば、少なくとも上正下譌の正誤判断規準とは整合していると期待するのが自然であろう。

3. 復古編の正誤判定規準

3.1 王珏による先行研究

王珏2013は、「走」の小篆字形について、復古編が大徐本の六書情報によって改めた小篆字形を示し、これが宋元代の篆刻に大きな影響を与えた

¹¹ 盧熊の増補について上平声・下平声・上声・去声部末に注記があるが、入声部末には注記が無い。掲出字を廣韻・集韻の掲出順序と比較すると、入声部以外では末尾で韻目の順序が戻る現象が見えるが、入声部末にはそのような現象が見えない。このことから、現行本の入声部は盧熊の増補を受けていないと推測される。

¹² 王珏2020, pp.300-304で増修復古編と續復古編について①復古編既収字は復古編の注記を基盤に増補していること、②復古編未収字の増補においても復古編の体例に倣うこと、③図形部品の金・今・走の字形が復古編に従うこと（この3つは上正下譌で現行大徐本の字形を誤りとする）、の3点について数例を示し、両書は基本的には復古編の方針を受け継いだものとした。一方、鈴木2021aでは図形部品のうち長・魚（この2つは筆迹小異に含まれる）の字形は復古編には従わない例があることを報告している。

可能性を指摘している。

王珏2020ではこれをさらに展開し、上正下譌が掲出する字形差78組全てについて議論している¹³。ただし、その興味を中心は「復古編に見える字形の来源は何か」であり、大徐本の六書情報ではなく、甲骨文から宋代の伝抄古文までを調査して、正しいとされる字形のうち68字（87%）、誤りとされる字形のうち74字（95%）は何らかの文字資料に見えるとした。これを踏まえて、王珏2020では上正下譌を編んだ動機を、説文の中で小篆字形が統一されていない問題を解消するためと推測した。

3.2 本調査の背景

王珏2020は、復古編は大徐本が掲出する小篆をそのまま用いるのではなく、何等かの修正を加えていることを指摘した。しかし、その修正の方針についてはあまり議論されていない。誤りとする字形を示す理由はその通行を憂慮したためと考えれば、その95%が他の文字資料に見えることは自然である。しかし、正しいとする字形の13%は他の文字資料に見えないため、正誤判断規準の運用や、それを敷衍した増補を行うことを難しくする。そこで、本稿では最も基本的な調査として、上正下譌の正誤判断規準が増補本で守られているかを調査する。

王珏2020では説文小篆を参照するのに清代の翻刻本である陳昌治本を用いており、また朱筠本で補うなどしている。陳昌治本は宋刊小字本の翻刻本に基づいたものとは言え、その掲出字形の細部まで宋元代の説文小篆の例として扱うのはやや早計と思われる。本稿では、復古編が成立した北宋よりは下るが、南宋刊元修本および南宋刊五音韻譜と比較する。

4. 調査と結果

4.1 上正下譌の正誤判断規準と大徐本

王珏2013は大徐本の六書情報から上正下譌が掲出する文字の背景を検討したが、王珏2020では六書情報よりも出土文字資料との類似によって議論している。類似した字形があったとしても張有がそれらを根拠として正しいとする字形を定めたかにはやや疑問がある。本稿では王珏2013の手法を上正下譌全項目に対して適用検討した。ただし、参照する説文の資料は南宋刊元修本のうち早修本とされる海源閣本（國學基本典籍叢刊影印¹⁴）と、宋刊五音韻譜（中國書店影印）である。その結果を表1に示す。

¹³ その他の附録についても全て調査している労作である。特に復古編が重視している李陽冰の小篆字形について、先行研究である周祖謨1966の「李陽冰篆書與例」が参照していない作品（たとえば李陽冰千字文など）も含めており、新たな知見を得ている。

¹⁴ 董婧宸2019は宋刊元修の大徐本を早修本と晚修本に分ける。續古逸叢書および四部叢刊の影印を通じて広く参照されてきた陸心源旧蔵本は晚修本とされ、さらに王輝・周豔茹2019は四部叢刊影印に加筆が多いことを実証している。また、董婧宸先生より私信にて海源閣旧蔵本も中華再造善本は朱筆を原文のように黒字で印刷している部分があり、字形の比較などには國學基本典籍叢刊影印を用いたほうが安全との情報を頂いた。

表 1：復古編の附録「上正下譌」が示す図形部品と大徐本に見える六書情報

- 「項番」は上正下譌の出現番号で、正誤の 1 組 1 つに対して番号を 1 つ与える。王珏 2020 の pp.239 - 273 「“上正下譌”研究」での番号と同じである。
- 「部品」は上正下譌が例示する小篆の図形部品を指示する現代漢字である。復古編の当該項の注記で示す楷書とは必ずしも同じでない(上正下譌における大半の注記は「天、他前切」のような体例で、楷書と反切を示すが、たとえば項番 47 は「古文泰字」としていて、図形部品の字体に対応する楷書を示さない。王珏 2020 でもこの項を「泰」で指示する)。
- 「影宋正」「影宋誤」は四部叢刊三編影印の黄丕烈旧藏影宋写本から切り抜いた字形である。
- 「元刊正」「元刊誤」は中華再造善本の元刊本から切り抜いた字形である。不鮮明な場合は模写字形も加える。
- 「複合」は当該部品が複合字であるかどうかを○(複合字)、×(単体字)で示す。たとえば「天」は大徐本の六書では「一」と「大」からなる複合字である。ただし、「非」「羽」「鳥」のように六書では複数の部品から成るように言うが、図形部品それぞれについて説明していない場合は△で示す。「反正爲乏」のように「他の複合字を左右反転したもの」なども(部品それぞれを説明しないが)複合字として扱う。また、許慎が判断した六書が無く、他者の説によって字形を論証していると思われる場合は「○?」とした。
- 「備考」では、大徐本の六書と復古編での正誤判断との関係、また、説文で掲出される字形について述べる。復古編が誤りとする字形が説文に見えず、また楷書化したものとも考え難い場合、誤りを示す必要性の推測材料として、李陽冰の篆書作品での状況や王珏 2020 での調査などを補足した。
- 「備考」で引く大徐本の説解は、海源閣本・五音韻譜と比較していることを考え、汲古閣四次様本(淮南書局翻刻本)から引いた。この版本は、明代に五音韻譜を再配列した趙壹均写本をもとに海源閣本を組み合わせたとされる。また、説解の全体ではなく、基本的には図形構造に関わる六書部分のみ引用し、字義に関しては基本的には省略するが、部品が単体字で六書が「象形」のみの場合には字義も併せて引く。
- 「備考」で五音韻譜と呼ぶ場合は本稿で調査した宋刊五音韻譜を指し、明代に広く通行した陳大科本(萬曆本)の状況とは異なる場合がある。
- 「備考」でいう上段・中段・下段(縦方向)、左・中間・右(横方向)などの表現は、画像の空間座標での上中下ではなく、2-3 個の図形部品として見た場合のものである。従って、空間座標的には上側にあるものを中段と呼ぶことがある。
- 説文小篆において、口腔の口を意味する小篆はのように描かれ、クニガマエ「口」などはのように描かれる。本稿で調査した範囲では、復古編は前者とそれ以外の楕円形・矩形を区別したと思われる箇所が多い。そのため、備考でも前者を指すのに口腔という表現を多用する。ただし、後者の図形部品は特定の小篆に関連付けられない場合が多い。たとえば「甘」と「日」も説文小篆において口・口と同様の図形的違いがあり、「甘」を囲むのは口腔の口だが、「日」の囲み線はクニガマエとは無関係である。海源閣本、南宋刊五音韻譜の説解において、口・口の楷書字形からの判別は困難なため、説解の引用においては大半「口」で表記し、備考や脚注で説明することとした。

項番	部品	影宋正	影宋誤	元刊正	元刊誤	複合	備考
1	天					○	大徐本の六書は「从一大」である。復古編が注目する字形差は下段の図形部品が「大」の小篆か、「𠂇」(「大」の籀文、説文では重文ではなく、独立の部首字として扱われる)の小篆かを見ていると思われる。海源閣本・五音韻譜では単体字は復古編が正しいとする字形だが、複合字の場合は誤りとされる字形も混じる。王珏 2020 では李陽冰は両字形を用いている(正しいとされる字形は三墳記、誤りとされる字形は詩書碑額に見える)ことを報告する ¹⁵ 。

¹⁵ 周祖謨1966では大徐本字形は嶧山刻石、泰山刻石、会稽刻石の字形とは異なるが、李陽冰は大徐本と同じ字形を用いたとしている。これは、詩書碑額が調査対象に含まれていなかったためと思われる。

2	毒					○ 大徐本の六書は「从屮从母」である。 復古編が注目する字形差は影宋本では判らないが、元刊本では下段の図形部品が「母」の小篆か、「母」の小篆かを見ていると思われる。影宋本と元刊本では上段の横画の本数が異なるが、それぞれの正誤字形では共通であり、正誤を判断する規準とはされていない。 「母」の小篆の中段は曲がりのない1本の横線で書かれる。一方、「母」の小篆は本来中段の横画を左右2本の横画に分けて描くが、彫版の難しさからか、多くの場合は左側を左下がり、右側を右下がりとして折れ線のようにすることが多い ¹⁶ 。 海源閣本・五音韻譜では単体字でも複合字でも折れ線となっており、復古編が誤りとする字形になっている。 王珏 2020 の調査ではどちらも李陽冰の用例は報告されていない。
3	走					○ 大徐本の六書は「从天止」である。 復古編は上段の部品が「天」単体字の小篆に従うかどうかを見ていると思われる(王珏 2013)。 大徐本において「天」単体字の小篆は横画の左右端を下方に下げる。一方、大徐本における「走」は「天」中段横画の右端を上曲げる。復古編ではこの大徐本の「走」の字形を誤りとし、「走」においても「天」中段横画の左右両方を下げる字形を正しいとする(本稿で調べた限り、復古編が小徐本を参照した形跡は無いが、小徐本もそのようである)。 海源閣本・五音韻譜とも「走」は全て誤りとされる字形である。ただし、金文や秦漢代の篆文は全て上に曲げる字形である。
4	歩					○ 大徐本の六書は「从止少」である。 復古編は下段の図形部品が「少」単体字の小篆に従うかを見ていると思われる。「少」は「从反止」とされ、「止」の小篆は最終画が右側に払って終わるので、「少」の小篆は逆に最終画を左側に払って終わるのが自然と判断される。しかし、最終画を一度左に延ばした後に、右側に戻す場合があり、復古編はこれを誤りとする。 海源閣本・五音韻譜とも単体字は復古編が正しいとする字形だが、複合字の場合にはしばしば誤りとされる字形である。
5	乏					○? 大徐本には六書が無く「春秋傳曰反正爲乏」と引く ¹⁷ 。 復古編は下段の図形部品が「正」単体字の小篆を左右反転したものとなるかを見ていると思われる。「正」単体字の最終画は右側に延ばして終わるので、「乏」の場合には左に延ばして終わる形状が自然である。しかし、項番4「歩」と同様に右側に戻す場合もあり、復古編はこれを誤りとする。 海源閣本・五音韻譜とも、単体字は正しいとされる字形だが、複合字は全て誤りとされる字形である。
6	章					○ 大徐本の六書は「从音从十」である。 この項に関しては復古編が注目する字形差は、影宋本と元刊本で異なる。影宋本が注目する字形差は、下部の縦

¹⁶ 王珏2020でも出土資料の字形がどちらなのか判断を避けている。

¹⁷ これは春秋左氏伝の宣公15年の箇所からの引用で、「天時反為災……文正反為乏」という文脈である。ここから当時の「乏」の通用字形が「正」の字形を反転させたものだったことを推測できる。しかし、そのような字形を取る理由は説明しないので、正確な意味での六書とは言えない。

							画は「日」を貫くかどうかの違いと思われる。影宋本は貫く字形を誤りとする。一方、元刊本では中段の図形部品が太陽の「日」かどうかと思われる。この図形部品は「音」に由来し、「音」の六書は「从言含一」とされ、さらに「言」は「从口辛聲」とされるので、この図形部品の外周は口腔の口に従うことになる。そのため、中段部品は「甘」の小篆に似た字形であるべきで、「日」の小篆のように外周を1本の曲線で作ったものは誤りとしたと思われる。 元刊本が言う字形差は海源閣本のような小字本では彫版の難しさもあり、殆ど無視されている。もっとも彫り易い筈の単体字であっても誤りとされる字形である。五音韻譜では大半が正しいとされる字形である。本稿では影宋本の規準に従う。
7	爰					○	大徐本の六書は「从又几聲」である。 復古編は上段の「几」と下段の「又」を繋ぐような短い画線を加えるかどうかの違いと思われる。復古編では2つに分かれている形状が正しく、短い画線によって繋がれている形状は誤りとする。 海源閣本・五音韻譜とも単体字では正しい字形だが、複合字となった場合には誤りとされる字形が混じる。
8	攸					○	大徐本の六書は「从支从人水省」である。 復古編が注目する字形差は、中間の「丨」が「水」の小篆に倣って逆S字型に湾曲させるかどうかの違いと思われる。湾曲させたものが正しく、楷書のように単なる直線につくるものを誤りとしたと見られる。 海源閣本・大徐本では僅かに曲げた弧のようにも見えるが、逆S字型の湾曲を持っているものは殆どない。
9	羽					△	大徐本の六書は「象形」であり、字形の詳細を判断する材料は無い。 復古編の影宋本・元刊本とも、下部で縦画に瘤のような凹凸を加えた形状を誤りとしたと思われる。元刊本のほうがやや明確である。王珏 2020 ではおそらく影宋本の規準を採っており、誤りとされる形状は出土資料や伝抄古文には見えず ¹⁸ 、わずかに李陽冰の千字文に見える「翮
							 (翮)がそれに近いとする。しかし微細な字形差であって判断が困難であり、また、李陽冰千字文の中では図形部品「羽」を必ずこのようにするとも限らない。 海源閣本では「習」「蓼」「翟」のように複合字の上側で用いる部品となった場合には、湾曲が圧縮されるために目立ってしまう傾向があると考えられ、意図したものなのか判定が困難である。本稿では、復古編が言う字形差は判断不能とした。
10	鳥					△	大徐本の六書は「象形鳥之足似匕从匕」である。 復古編が注目している字形差は、影宋本でははっきりしない。元刊本では「鳥」の上段の「白」、また、その下の「一」に相当する部分が1本の連続した線で描かれているか、それを不連続にしているかの違いと思われる。元刊本では楷書のように不連続にしたものを誤りとす

¹⁸ 王珏2020は大徐本の字形に関しては、縦画を左に払ったまま、右に戻さないものが見えることを指摘し、復古編が誤りとする字形が大徐本には見えないと判断している。

						<p>る。王珏 2020 では元刊本の字形差にのみ注目する。影宋本の黄丕烈旧蔵本には書き込みがあり、元刊本と同様の字形差を意図していた可能性が指摘されている。</p> <p>大徐本の六書では、下部の部品が「火」でない程度しか情報が無いので、元刊本は大徐本の見出し字形に近いものを正しいとし、楷書に近づいたものを誤りとしたものと思われる。</p> <p>海源閣本・五音韻譜の単体字は復古編で正しいとされる字形であり、複合字でも大半が正しいとされる字形である。王珏 2020 は、李陽冰は千字文や三墳記では正しいとされる字形を用いるが、謙卦碑では誤りとされる字形を用いることを指摘する¹⁹。</p>
11	焉					<p>×</p> <p>大徐本の六書は「(焉鳥黄色出於江淮)象形」である。復古編が注目している字形差は、全体が連続しているか、上段の図形部品が「正」として分離しているかの違いと思われる。</p> <p>復古編は全体が一体化しているものが正しく、上部が「正」として分離しているものは誤りとするが、説文の六書情報ではこの正誤を判断するのは困難である。大徐本の単体字の字形に従ったものと思われる。</p> <p>海源閣本・五音韻譜とも全て正しいとされる字形である。王珏 2020 は、李陽冰は千字文では正しいとされる字形を用いる一方、三墳記では誤りとされる字形を用いることを指摘する²⁰。</p>
12	畢					<p>○</p> <p>大徐本の六書は「从華象畢形或曰由聲」である。復古編が注目する字形差は、上段の図形部品が「由」か「田」かと思われる。おそらく「或曰由聲」とされていることから、最上画は折れ線で書くものを正しいとする。</p> <p>五音韻譜は全て、海源閣本は1例(燁)を除き田に作る。王珏 2020 の調査では由に作る資料は見つかっていない。</p> <p>段注本は六書の「由聲」は誤りであるとして「田聲」に改め、小篆の上段の部品も「田」に改める。</p>
13	爭					<p>○</p> <p>大徐本の六書は「从受廌」である。復古編が注目する字形差は、下段の「尹」の中央の縦画が上に突き出て、さらに右に曲げるか否かの点と思われる。「尹」の六書は「从又」であるから、中央の縦画の上を曲げる必要は無いが、「争」の下段の縦画は「廌」とされることから、「又」を貫いた上で右に曲げるのが正しいとしたものと思われる。</p> <p>海源閣本では彫版の難しさからか、誤りとされる字形のほうが多い。五音韻譜では大半が正しい字形である。</p>
14	阜					<p>×</p> <p>大徐本の六書は「(山無石者)象形」である。復古編が注目している字形差は左側の縦画が上部を右に曲げるか否かの点と思われる(3箇所ある「コ」が横画を突き出すか縦画を突き出すかという違いもあるように見えるが、王珏 2020 と同様、本稿でもこの違いは無視する)。六書からこの正誤を判断することは困難であり、大徐本の単体字の字形に従ったものと思われる。ただし、大徐本でも古文で阜を含む字形は大半上部を曲げない字形である。</p> <p>海源閣本・五音韻譜は阜部に排された小篆は正しいとされる字形であるが、それ以外の部首ではしばしば誤りとされる字形になっている。</p>

¹⁹ 謙卦碑の用例は国会図書館デジタルコレクションのhttps://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2554263/3/_/22/_/25。

²⁰ 三墳記の用例は早稲田大学古典籍データベースの拓本貼込帖 (https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/chi06/chi06_01232/chi06_01232_p0007.jpg) で確認できる。

15	未					○	大徐本の六書は「从木推丰」である。復古編が注目している字形差は下段の図形部品が「木」か「巾」かの違いと思われる。六書に従い、横画は5本である形が正しく、楷書のように4本になっているものを誤りとしたと思われる。 海源閣本・五音韻譜とも正しいとされる字形ほぼ統一されている。ただし、海源閣本では𠄎をのようにつくっており、これを復古編の誤りとする字形と判断した。
16	乃					×	大徐本の六書は「象气之出難也」である。復古編の注目する字形差は、左側の画線が上段から横画として始まるか、下段からの縦画として始まるかの違いと思われる。六書から正誤を判断するのは困難であるので、復古編は大徐本の単体字の字形を正しいとし、楷書に近い字形を誤りとしたものと思われる。 海源閣本・五音韻譜では単体字は正しいとされる字形であるが、複合字では誤りとされる字形も多い。
17	可					○	大徐本の六書は「从口匕匕亦聲」である。復古編が注目する字形差は、右側の縦画が右側に瘤を作るか、左側に瘤をつくるかを区別したものと思われる。「匕」の六書が「反巧也」であることから、左側に瘤をつくる字形を正しいとしたものと思われる。 海源閣本・五音韻譜は復古編が正しいとする字形で統一されている。 王珏 2020 の調査では、ここで誤りとされる字形は汗簡や南北朝の碑文に数例見られる程度である。
18	豆					○	大徐本の六書は「(古食肉器也)从口象形」である。復古編が注目する字形差は、中段の部品を口腔の口にするかどうかの点と見られる。正しいとされる字形は1画で描いた楕円であるのに対し、誤りとされる字形は口腔の口のように2画である。字義が飲食に関係するため、六書から中段の部品が口腔の口かどうか判断するのは難しいが ²¹ 、大徐本の小篆字形と考え合わせることで、口腔の口にする字形を誤りとしたと思われる。 海源閣本・五音韻譜とも1例(桓)を除き復古編が正しいとする字形で統一されている。
19	井					×	大徐本の六書は「象構韓形鬯象也」である。復古編は「井」と「井」の違いに注目したものと思われる。説文は単体字として「井」を掲出しないので、この違いを議論するのは困難である。復古編は大徐本の単体字の字形に従ったものと思われる。 海源閣本・五音韻譜では単体字は復古編が正しいとする字形だが、複合字では誤りとされる字形も使われる。見出し字を大きく彫る五音韻譜のほうが誤りとされる字形は少ないので、海源閣本は版木の漫漶などによって中央の点を失った可能性もある。
20	今					○	大徐本の六書は「从人丿古文及」である。復古編が注目する字形差は下段の部品が「丿」か、これを左右反転しているかの違いと思われる。 海源閣本・五音韻譜とも単体字は正しいとされる字形だが、複合字の場合には大半が左右反転している。海源閣

²¹ 段注本は説解に見える「口」について「音圍、象器之容也」と注している。口(クニガマエ)・圍とも反切が羽非切であることから、説解において口腔の口ではなく口で表記するのが正しいという議論も可能である。しかし、海源閣本・五音韻譜・汲古閣未改本での当該箇所での口・口の判別が困難なため、ここでは口腔の口によって表記した。

						本や五音韻譜では「𠂔人丁」のような字形になっている場合もいくつか見られ、これらは復古編と整合していると思われた。また、古文字形は「今」を単体字と同様に作る場合が多いが、これは小篆と古文で意識的な使い分けをしていた可能性があるため、除外した。
21	高					○ 大徐本の六書は「象臺觀高之形从門口」である。復古編が目する字形差は「一」と「冂」がその間の部品によって連結されるかどうかと思われる。いわゆる「クチ高」と「ハシゴ高」の違いである。この部品が何であるか明確な説明が無いが、六書に続いて「與倉舍同意」とあることから口腔の口とは考え難いであろう ²² 。六書だけから正誤を判断することは困難だが、大徐本の単体字と説解を考えあわせたものと思われる。これに加え、元刊本では下段の「同」の内部を口腔の口に作るものは誤りとするように見えるが、本稿では判断規準に含めない。 海源閣本・五音韻譜とも「高」に関してはクチ高の字形で統一されている。ただし、鈴木 2021b で報告したように「復」がハシゴ高のような構造になっているものは両書にしばしば見える。 王珏 2020 も指摘するようにハシゴ高の字形は先秦期から広く用いられるもので、李陽冰の篆書千字文でもハシゴ高を用いる(周祖謨 1966 では李陽冰がハシゴ高を用いた例は報告していない)。
22	京					○ 大徐本の六書は「从高省丨象高形」である。復古編の注目する字形差は中段の図形部品が口腔の口かどうかと見られる。この部品を項番 21 「高」の中段の部品が引き継がれたと考えれば、これも口腔の口に作るものは誤りということになるだろう。 海源閣本・五音韻譜とも単体字の字形で統一されている。李陽冰は三墳記では誤りとされる字形を用いている ²³ 。
23	夔					○ 大徐本の六書は「从田人从夂」である。復古編が目する字形差は中段の「人」の右画を右に払うか、一度右に開いた後に左に戻して左に払うかの違いと思われる。大徐本の単体字は右に払う字形であるが、復古編はこれを誤りとする。 王珏 2020 では、中段の図形部品が「人」であることが判るように、その右画を左に払うようにしたものと推測している。 ただし五經文字は「夔」は「人」ではなく「儿」に従うとしており、もし張有が五經文字を参照したか、あるいは張有が参照した説文の六書がそのようだったのであれば(段注本も「人」ではなく「儿」に従うとするが、集韻や類篇にはこの六書に関わる言及がないので、北宋期の状況は不明である)、「儿」の小篆は右画が瘤を作るので、狭い空間の中にこれを残すためにこのようにデザインした可能性も考えられる。同様の意識が推測される項番 24 「夂」、項番 26 「夔」も参照されたい。 海源閣本・五音韻譜とも全て(復古編が誤りとするところの)単体字の字形に従う。段注本においても、中段の右画

²² 説解に見える「口」は、段注本は「音圍」と注しており、口腔の口ではなく口(クニガマエ)で表記するのが正しいという議論も可能である。しかし、海源閣本・五音韻譜・汲古閣未改本での当該箇所での口・口の判別が困難なため、ここでは口腔の口によって表記した。

²³ 三墳記の用例は早稲田大学古典籍データベースの拓本貼込帖 (https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/chi06/chi06_01232/chi06_01232_p0006.jpg) で確認できる。

						は瘤を作るものの、終筆は右に払って終わる。
24	爰					○ 大徐本の六書は「从爰允聲」である。 復古編が注目する字形差は中段の「儿」の右画が右に払って終わるか、一度右に開いた後に左に戻して左に払うかの違いと思われる。大徐本の単体字形は右に払って終わる字形であるが、復古編はこれを誤りとする。 王珏 2020 は、正しいとする字形をこのように改める理由については議論していない。項番 23「爰」は六書が中段部品を「人」とするために理由を議論できたが、「允」の六書は「从儿吕聲」であるから、この項では「人」ではないので同じ議論が難しいと思われる。「儿」の小篆字形  (海源閣本)の右画の瘤を残すためのデザイン変更の可能性が考えられる。 海源閣本・五音韻譜とも全て(復古編が誤りとするところ)の単体字の字形に従う。段注本においては、中段の右画は瘤を作るものの、終筆は右に払う。
25	出					× 大徐本の六書は「象艸木益茲上出達也」である。 復古編が注目する字形差は上下段の図形部品が分離しているか、下段の図形部品が上段の図形部品の画線を延ばして 1 本で描くかの違いと思われる。六書だけでは正誤判断が困難であり、大徐本の単体字の字形をそのまま採用したものと思われる。 海源閣本・五音韻譜とも複合字においては復古編が誤りとするものがしばしば見られる ²⁴ 。 また、図形部品のうち崇・寿・昂が含む「出」は六書の上ではこの「出」だが、多くの説文の版本で楷書の「出」と同じ字形に作る(段注本では単体字の「出」のように改めている)。これらは正しい字形として扱った。
26	爰					○ 大徐本の六書は「从爰兕聲」である。 復古編が注目する字形差は中段の「人」の右画が右に払って終わるか、一度右に開いた後に左に戻して左に払うかの違いと思われる。大徐本の単体字形は右に払って終わる字形であるが、復古編はこれを誤りとし、項番 23「爰」や項番 24「爰」と同様に改める。 王珏 2020 は、正しいとする字形をこのように改める理由については議論していない。「兕」の六書は「从人在凶下」であるので、項番 23「爰」における王珏 2020 のような議論も可能である。 海源閣本・五音韻譜とも(復古編が誤りとするところ)の単体字の字形で統一されている。「兕」の小篆は、復古編の  影宋本本編では  のように作るのに対し、説文では  (海源閣本)や  (五音韻譜)、また復古編も元刊本では  のように、むしろ「儿」に似た形に作る。段注本では六書を「从儿在凶下」に改めている。
27	舍					○ 大徐本の六書は「从人巾象屋也口象築也」である。 復古編が注目する字形差は、下段の部品が口腔の口かどうかという点と思われる ²⁵ 。ただし、影宋本と元刊本では

²⁴ 王珏2020では、誤りとされる字形は説文に見えないとしているが、これは陳昌治本で調査したためと思われる。

²⁵ 説解に見える「口」は、海源閣本・五音韻譜では口・口の判別が困難なため、ここでは口腔の口で表記したが、説解の意味からは口(クニガマエ)に作るのが正しいであろう。段注本も「口音圍」と注している。

						<p>判断規準が逆転しており、影宋本では口腔の口であるものを正しいとするのに対し、元刊本ではこれを誤りとする。王珏 2020 では元刊本の規準が張有の意図したものと考える。六書が「象築也」とすることからも、元刊本のように正しくは口腔の口ではないと判断するのが自然であろう。</p> <p>五音韻譜は全て、海源閣本は1例(捨)を除き、元刊本で正しいとされる字形で統一される。</p> <p>王珏 2020 の調査では誤りとされる字形は先秦の資料によく見える字形とするが、李陽冰の用例の報告は無い。</p>
28	𠂔					○ <p>大徐本の六書は「从巾曲而下垂𠂔相出入也」である。復古編が注目する字形差は、左側の図形部品が単体字の「方」かどうかという点と思われる。六書が言うように左側の図形部品は「方」ではなく、その上段は「巾」に由来するものであり、「方」のように横画をL字型に作るものを誤りとする。具体的には「巾」のように横画の左右とも上に曲げるものを正しいとする。</p> <p>海源閣本・五音韻譜とも復古編で正しいとされる字形で統一される。項番 68「方」も参照されたい。</p>
29	𠂔					○ <p>大徐本の六書は「从弓用聲」である。復古編が注目する字形差は、上段の図形部品は「弓」であるかどうかという点と思われる。六書に従い、「弓」につくるべきで、中間の縦画に瘤を付加した字形を誤りとしたと思われる。</p> <p>海源閣本・五音韻譜とも復古編が正しいとする字形である。</p> <p>王珏 2020 の調査では誤りとされる字形は先秦の資料によく見える字形で、李陽冰も千字文で用いるとする。</p>
30	𠂔					× <p>大徐本の説解は「(刻木𠂔𠂔也)象形」であり、字形の詳細を議論する材料が無い。</p> <p>復古編で注目している字形差は、上段の図形部品においてL型の画線を中央の縦画で止めるか、縦画に交差してさらに右下まで垂らした「𠂔」のような形になっているかという点と思われる。</p> <p>六書からこの正誤を判断することは難しいが、この図形部品は「互」(「象」の上段の図形部品で、部首字でもある)を含むものではないので、それと区別できるように、その中段の横画を右側に垂らす字形が正しいとしたと思われる。</p> <p>海源閣本・五音韻譜とも単体字は復古編で正しいとされる字形だが、複合字では誤りとされる字形も混じる。</p>
31	𠂔					○ <p>大徐本の六書は「从門上下覆之」である。復古編で注目している字形差は、「門」以外の図形部品を3画で描くか、4画で描いて門内部の横画を門に接触させるかの違いと思われる。六書ではこの正誤を判定するのは難しく、大徐本の単体字の字形に従い、楷書化した字形を誤りとしたものと思われる。</p> <p>海源閣本・五音韻譜とも単体字は復古編で正しいとされる字形だが、複合字では誤りとされる字形も混じる。</p>
32	𠂔					○ <p>大徐本の六書は「从戈从甲」である。復古編で注目している字形差は左下の図形部品が「甲」になっているかどうかという点と思われる。六書に従い、「甲」の小篆に従うのが正しく、楷書の「戎」のように「丁」の小篆のように作るのは誤りとしたと思われる。</p> <p>海源閣本・五音韻譜とも復古編で正しいとされる字形で統一されている。</p>

33	衆					○	大徐本の六書は「从叻目」である。 復古編で注目している字形差は、上段の「𠂔」の上に縦画が追加されているかどうかという点と思われる。六書が「目」とするので「𠂔」に作るのが正しく、楷書の「血」のように縦画を追加した字形は誤りとしたものと思われる(説文小篆の「血」は「𠂔」ではなく「皿」に従い、ここで用いられる図形部品の形状とは異なる)。 海源閣本・五音韻譜とも単体字は復古編で正しいとされる字形だが、複合字では誤りとされる字形も混じる。
34	交					○	大徐本の六書は「从大象交形」である。 復古編が注目する字形差は、全体が一体化しているか、分離しているかを問題にしたものと思われる。しかし六書情報ではこの正誤を判断するのは困難であり、大徐本の単体字の字形に従い、楷書に近い字形を誤りとしたものと思われる。 五音韻譜は全て、海源閣本は1例(鮫)を除き、復古編で正しいとされる字形で統一されている。
35	老					○	大徐本の六書は「从人毛匕」である。 復古編が注目する字形差は、中段の図形部品が下段の「匕」の全体を囲むか、左下を開くかの違いと思われる。六書に従えば、中段の部品は「人」であって「匕」ではないことを強調するため、「匕」の小篆のように全体を囲んだ字形を誤りとしたものと思われる。 五音韻譜は全て、海源閣本は1例(著)を除き、復古編で正しいとされる字形で統一されている。
36	石					○	大徐本の六書は「在厂之下口象形」である。 復古編が注目する字形差は、右下の図形部品が口腔の口かどうかという点と思われる。大徐本字形に従い、口腔の口を作るものは誤りとする。「口」が何かは説明が無いが、小徐本では「臣錯曰音圍」としており、口腔の口ではない ²⁶ 。ただし、影宋本の本編において図形部品として石を含む小篆はしばしば誤りとされる字形になっている。 五音韻譜は全て、海源閣本は1例(磊)を除き、復古編で正しいとされる字形で統一されている。
37	而					×	大徐本の六書は「象毛之形」である。 復古編が注目する字形差は中段の横画を左右で下に曲げるか、曲げずに別の縦画を左右に描くかの違いと思われる。しかし六書情報によって正誤を判断するのは難しく、大徐本が中段の横画を左右で曲げていることに従ったものと思われる。説文の諸版本に見える字形差としては、 と (どちらも海源閣本)のように、縦画が下段の「冂」に接するか(前者)、中段の横画までで止めるか(後者)という違いもある。単体字としては後者、複合字における部品としては前者につくることが多いが、中段の横画が1本で描かれていることに注目し、本稿では縦画の違いは区別しない。 復古編が正しいとする字形は出土資料に多く見える。一方、復古編が誤りとする字形は王珏 2020 が指摘するように出土資料には殆ど見えず、広く使用されたとは考え難いが ²⁷ 、序文で称揚している李陽冰の作品の中ではこ

²⁶ 説解に見える「口」について、小徐本が言う「音圍」に整合するのは口(クニガマエ)であるが、海源閣本・五音韻譜の説解では口・口の判別が困難であり、ここでは口腔の口で表記した。

²⁷ 『漢魏六朝隋唐五代字形表』で確認すると謙卦碑の「而」は5種類の字形で書かれており、その中には復古編が正しいとする字形も、誤りとする字形も見える。同碑の「謙」の字形は12種もあることを考えると(金美鈴2014)、この字形差は文字学的な判断ではなく、字形のバリエーションを増やすための装飾と推測される。ただし、復古編より先に成立した『古文四聲韻』は「古孝經」を典拠にこの字形を掲出しており、

							こで誤りとする字形を用いている場合があるので、その正誤を問題にした可能性がある。
38	吳					○	大徐本の六書は「从矢口」である。 復古編が目する字形差は上段の部品が口腔の口かどうかと思われる。六書から口腔の口に作るものが正しいとする。 海源閣本・五音韻譜とも単体字は復古編で正しいとされる字形に作るが、複合字の場合には誤りとされる字形が混じる。
39	亢					○	大徐本の六書は「从大省象頸脈形」である ²⁸ 。 復古編が目する字形差は、全体が一体化しているか、上下に分離しているかの違いと思われる。六書では上下に分離しているものが自然なように思われるが、復古編は一体化した字形を正しいとする。王珏 2020 は一体化した字形のほうが金石資料では多く、その影響を考えている。 海源閣本・五音韻譜とも単体字の場合は復古編が誤りとする字形であり、複合字の場合には復古編が正しいとする字形も混じる。 一体化した字形が大徐本の説解で説明できるかには疑問があるが、續復古編は一体化した字形を単体で本編にも掲出しており、そこで引かれる六書は上記の大徐本と全く同じなので、少なくとも續復古編の著者の曹本はこの説解と字形に齟齬がないと考えたように思われる。
40	囟					×	大徐本の六書は「象形」である。 復古編が正しいとする字形は両本で共通であるが、注目している字形差は影宋本と元刊本で異なっている。影宋本が誤りとする字形は、上部の縦画が無く、さらに囲み線は上部中央で断裂している。一方、元刊本では囲み線は上部中央で断裂している。一方、元刊本では囲み線は上部中央で断裂している。一方、元刊本では囲み線は上部中央で断裂している。 正しいとする形は大徐本の単体字の字形に整合するので、本稿では影宋本と元刊本で共通の違いとして、上部の短い縦画が無いものを全て誤りとし、囲み線の断裂や折れに関しては無視した。 海源閣本・五音韻譜とも単体字は復古編で正しいとされる字形に作るが、複合字の場合には誤りとされる字形が混じる。
41	云					×	大徐本の説解は「古文省雨」である。 復古編が目する字形差は、終筆部分の曲げの有無と思われる。六書からはこの正誤を判断することは困難だが、終筆部分を曲げる装飾を不要としたように見える。しかし、影宋本が正しいとする字形にも曲げがあり、元刊本の規準では誤りとすべきもののようにも見える。五 音韻譜でも のように曲げの大きさは連続的である。 王珏 2020 では終筆部分がどの程度曲がるかによって説文では3種類の字形があるとしているが、そこで示されているのは説文の単体字(おそらく陳昌治本から採った

宋・宣和年間成立の『集篆古文韻海』をはじめ明清時代の多くの金石字書に引き写されている。これが宋代以降の篆書作品にどの程度影響を与えたかの調査は今後の課題としたい。

²⁸ 鈴木2021bでは海源閣本・五音韻譜での「亢」の掲出状況を比較しているが、説文の六書の引用解釈を誤っていることを大西克也先生にご指摘頂いた。ご指摘に感謝し、お詫びして訂正いたします。

						<p>ものであろう)、影宋本が正しいとする字形、影宋本が誤りとする字形の3つであって、説文の版本のどの項目の小篆がそうであるかは明確にしている。本稿では影宋本が誤りとして示す字形のように終筆が明確に反転しているものを「復古編が誤りとする字形」と判断するが、海源閣本・五音韻譜とも復古編が誤りとする字形は単体字・複合字とも見えない。</p>
42	非					<p>△ 大徐本の六書は「从飛下鞞取其相背」である。復古編が目する字形差は、中間の2本の縦画が直線なのか、あるいは終筆部分で左右に開き、左右の横画の最終画と一体化しているかの違いと思われる。六書は2つの部品から成っていることは説明しているが、その凶形部品は単体字ではなく、復古編が目する字形差を議論するには不十分である。ただし、「非」に関しては秦刻石などの字形(復古編が誤りとする字形)をもとに李陽冰が説解を改め、「兩手相背」としていたことが小徐本の巻36 怯妄篇に見える。大徐本にはそのような情報は書かれていないが、李陽冰の筆法と大徐本の両方を学んだ張有にとっては、この2つの字形を区別する意識はあったものと思われる。海源閣本・五音韻譜では基本的に復古編で正しいとされる字形だが、複合字では誤りとされる字形も見られる。</p>
43	悉					<p>○ 大徐本の六書は「从心先聲」である。また、「先」の六書は「从人匕象簪形」である。復古編が目する字形差は、中段の凶形部品が「冫」の小篆のように全体を囲むか、左下を開くかの違いと思われる。項番35「老」と同じ考え方で、開くものを正しく、囲むものを誤りとしたと見られる。海源閣本・五音韻譜とも復古編では誤りとする字形である。</p>
44	兪					<p>○ 大徐本の六書は「从人从舟从彡水也」である。復古編が目する字形差は、「彡」に相当する部分である。影宋本・元刊本とも正しいとする字形はほぼ同じだが、影宋本では「彡」を単純な弧で作るものは誤りとし、元刊本では「刀」に作るもの(楷書の「兪」「俞」の違いと言えるだろう)を誤りとする。元刊本の正誤は紛れが無いが、海源閣本・五音韻譜ではそのように誤る例が見当たらないため、影宋本の正誤を採る(王珏 2020 も元刊本の正誤については議論しない)。海源閣本・五音韻譜は全て誤りとされる字形である。</p>
45	勾					<p>○? 大徐本の説解には六書は無く、「遼安説人爲勾」が字形の説明と扱われる。復古編ではおそらく項番35「老」や項番43「悉」と同様に「人」が全体を囲むべきではないと判断したものと思われる。</p> <p>王珏 2020 は復古編も本編では 、形相類では  となっていて、整合性がないことを指摘している。ただし元</p> <p>刊本の本編では 、形相類では  であり、本編と上正下譌の間では整合が取れている。海源閣本・五音韻譜では単体字を含め多くの小篆が、復古編が誤りとする字形である。</p>
46	甚					<p>○ 大徐本の六書は「从甘甘匹」である(段注本は「从甘匹」と改めている)。</p>

						<p>復古編が注目する字形差は下段の図形部品「匹」について、匚(かくしがまえ)に作るか、匚(はこがまえ)に作るかに注目したものと思われる。</p> <p>「匹」の六書は「从八匚」であり、匚部に排されるので、正しくは匚に作るべきで、匚に作るものを誤りとしたと思われる。影宋本は匹の初画が左に突き出るかどうかで区別するが、元刊本はさらに匚の終筆を下に曲げるかどうかも含めているように見える。本稿では前者だけに注目した(王珏 2020 でも同様である)。</p> <p>海源閣本・五音韻譜の単体字は復古編が誤りとする字形になっており、海源閣本では誤りとされる字形のほうが多い。図形部品の匚をどのように匚から描き分けるかは説文の版本によって揺れがあり、海源閣本は復古編元刊本のように2つの特徴を備えるが、宋刊五音韻譜では終筆部分を下に曲げるかどうかだけで区別しており、甚のように複合字が声符として用いられる場合はさらにこの描き分けは不明確である。</p>
47	𠂔					<p>○? 大徐本の説解は「古文泰」であり、六書を欠く。復古編が注目する字形差は、上段の部品の左右の脚が開いているか、あるいは「二」を囲むように狭めるかの違いと思われる。</p> <p>説解ではこの違いの正誤を判断する材料が無いが、正文の「泰」の六書が「从・从水大聲」であり、「大」を声符とすることから、「𠂔」の上段は「大」の小篆に倣うべきで、「二」を囲むように狭める必要は無いと考えたと推測することもできる。</p> <p>海源閣本 ・五音韻譜 とも、影宋本のように開いた形とは言い難いが、元刊本の正誤判断では正しい字形と見てよいであろう。王珏 2020 も同様の判断である。</p>
48	堇					<p>○ 大徐本の六書は「从土从黄省」である。復古編の注目する字形差は影宋本と元刊本で異なる。影宋本は中央の縦画を上下の部品で連続させるかに注目したと見られる。一方、元刊本では中央の部品が口腔かどうか注目したと見られる(王珏 2020 では元刊本の字形差に関しては議論が無い)。「黄」の六書は「从田疋聲」であるから、中段の部品は田の省略であり口腔ではない(ただし、元刊本でも中段と下段の縦画は不連続である)。この規準で判断すると影宋本の字形は2つとも誤りということになる。</p> <p>王珏 2020 では影宋本の字形差で判断しているが、本稿ではより明確な元刊本の規準により判断した。</p> <p>海源閣本・五音韻譜とも、単体字は正しいとされる字形だが、複合字の場合には誤りとされる字形も混じる。影宋本の規準の場合は単体字も含め大半が誤りとなる。</p>
49	金					<p>○ 大徐本の六書は「从土左右注象金在土中形今聲」である。復古編が注目する字形差は、上段の「今」が項番 20「今」に従うかという点と思われる。</p> <p>海源閣本・五音韻譜とも、大半が復古編では誤りとされる字形である。ごく一部、上段の図形部品が「目人丁」のような字形になっている場合もいくつか見られ、これを復古編が正しいとする字形と見做した。</p>
50	斗					<p>× 大徐本の六書は「象形有柄」である。復古編が注目する字形差は、縦画が上に突き出るかどう</p>

						<p>かと思われる。最上部は柄杓の器に相当するので、柄に相当する縦画が突き出る形は誤りという判断と考えられる。</p> <p>海源閣本・五音韻譜とも、単体字は復古編で正しいとされる字形であるが、複合字では誤りとされる字形も見える。</p> <p style="text-align: center;"></p> <p>増修復古編では  のように、さらに象形性を高めた字形を用いる。</p>
51	𡗗					× <p>大徐本の六書は「(案坡土爲牆壁)象形」である。</p> <p>復古編が目する字形差は、3つの図形部品のそれぞれが上部に突き出た縦画を持つかという点と思われる。六書から正誤を判断することは難しいが、「私」などに用いられる「ム」の小篆を3つ重ねたものではないことを意図した正誤判断と思われる。「ム」の説解は「韓非曰倉頡作字自營爲ム」であり、𡗗を構成する図形部品ではないとして良いであろう。</p> <p>本稿では各図形部品のどれかの起筆部分に垂直な縦画が突き出ている場合は誤りとし、各図形部品が円か、三角形か、菱形²⁹かは問わないものとした。</p> <p>海源閣本・五音韻譜とも単体字は復古編で正しいとされる字形だが、複合字では誤りとされる字形も混じる。</p>
52	亞					× <p>大徐本の六書は「象人局背之形」である。</p> <p>復古編が目する字形差は、中段の部品を2本の折り曲げた線で描くか、6本の線で描くかの違いと思われる。六書では正誤の判断が困難である。</p> <p>海源閣本・五音韻譜とも単体字は復古編で誤りとされる字形だが、複合字では正しいとされる字形が多い(段注本でも揺れている)。王珏 2020 では出土文字資料に見える字形は復古編が正しいとする字形が多いため、その影響を考えるが、小徐本では単体字も復古編が正しいとする字形なので、張有が参照した大徐本もこの字形であったかもしれない。</p>
53	五					○ <p>大徐本の六書は「从二陰陽在天地間交午也」である。</p> <p>復古編が目する字形差は、中段の図形部品が「X」(小篆は)のように作るか、「又」(小篆は)のように作るかという点と思われる。</p> <p>六書ではこの中段の部品を単体字とはしないけれども、前者は「五」の古文であり、後者の説解は「(芟艸也)从丿从乚相交」であるので、前者と字形が整合するのが正しいと判断したと思われる。</p> <p>海源閣本・五音韻譜とも復古編で正しいとされる字形で統一されている。</p> <p>王珏 2020 の調査では、誤りとされる字形は金石資料にいくつか見るとしているが、李陽冰が用いた例は挙げられていない。</p>

²⁹ 「壘」は大徐本の説解中で「齊」を指示するもので、この上段の図形部品は説文の中では「𡗗」とは別のものだが、これについても同様の字形の不統一がある。五音韻譜においては大半が上段部品を3つの菱形で描くが、海源閣本の場合には中央を楷書のように「日+Y」につくり、また複合字の場合には三角形や円形になる場合がある。王珏2020では項番51の中に「夔」を省略した或体である「夔」は含めるが「壘」は含めていないと思われる。

54	聾					○	<p>大徐本の六書は「象耳頭足舛地之形」である。 復古編が注目する字形差は、まず上段の「耳」に相当する図形部品が中段の図形部品と接触しているかどうかの点と、次に下段が口腔の口であるかどうかという点と見られる。下段については六書から口でないことは言えるが、上段の正誤を判断するには六書では不十分で、大徐本に従ったものと思われる。 海源閣本・五音韻譜ともほぼ全て復古編が正しいとする字形だが、海源閣本では複合字において下段が口になっているものが1例あり(聾)、これを誤りとした。 上段については海源閣本・五音韻譜とも揺れが見られないが、王珏 2020 によれば先秦期の文字資料では誤りとされる字形のほうが多いとしているが、李陽冰がその字形を用いた例は挙げられていない。</p>
55	酉					×	<p>大徐本の六書は「象古文酉之形也」である。 復古編が注目する字形差は口の内部の下段の横画を折れ線で描くか、単なる水平線で描くかの違いと思われる。六書からこの正誤を判断するのは困難で、復古編は楷書に近い字形を誤りとしたものと推測される。 海源閣本・五音韻譜とも、単体字は復古編で正しいとされる字形だが、複合字の場合には誤りとされる字形もしばしば見える。</p>
56	𠂔					○?	<p>大徐本の六書は「古文酉从𠂔(𠂔爲春門萬物已出酉爲秋門萬物已入)一閉門象也)」である。 復古編が注目する字形差は、中段の図形部品は左右に分類しているか、1本の画線で描くかの違いと思われる。六書から、最上部の横画だけは「一」として左右を連続させて描くが、𠂔の小篆そのものは左右が分離した字形なので、中段の図形部品も1本で繋いで描くのは誤りと判断したと思われる。あるいは、この図形部品が小篆の図形部品として用いられる場合の形状は古文の字形とは異なるという意図とも考えられる。 海源閣本・五音韻譜では単体字は古文であるので復古編で誤りとされる字形だが、小篆に声符として組み込まれた場合には大半が復古編で正しいとされる字形である。</p>
57	足					○	<p>大徐本の六書は「从止口」である。 復古編が注目する字形差は、上段の部品が口腔の口かどうかという点と思われる。この口が口腔であるか六書だけから判断することは困難だが、大徐本は「徐鍇曰口象股脛之形」と補足しており、これに従えば口腔ではないことになるので、それに従ったと見ることができる。段注本では説文の部首排列が齒・牙・足・疋・品・龠と並んでいることから、この図形部品は口に関係すると考えているが³⁰、小篆を口腔の口に改めることはしていない。 海源閣本・五音韻譜とも、単体字・複合字とも大半は復古編が正しいとする字形である。</p>
58	𧈧					○	<p>大徐本の六書は「从非𧈧聲」である。 復古編が注目する字形差は、左下の図形部品の「非」を「非」の小篆のようにつくるかどうかという点と思われる。「非」の六書は「象形在一之上地也」であるので、「非」のように作るのは誤りと判断したものと思われる。 海源閣本・五音韻譜とも、単体字・複合字とも大半は復</p>

³⁰ 段注本では「今各本从口非也」と注し、口腔の口であるべきものを口(クニガマエ)に改めていると批判しているが、海源閣本・汲古閣本・平津館本などを見ても説解の楷書は口腔の口のようなものである。

							古編が正しいとする字形である。 王珏 2020 による調査では、誤りとされる図形部品は唐写本説文解字木部残巻に見えることを指摘するが、李陽冰の用例は挙げられていない。
59	鬲					×	大徐本の六書は「象腹交文三足」である。 復古編が注目する字形差は、項番 21「高」のように、全体が 1 つに繋がっているか、分かれているかの違いと思われる。六書ではこの正誤を判断するのは困難であり、復古編は大徐本の単体字の字形に従ったと思われる。誤りとされる字形は秦石刻文や李陽冰の作品にも見られるので ³¹ 、これらに対する補正として記した可能性がある。海源閣本・五音韻譜とも、単体字・複合字とも大半は復古編が正しいとする字形であるが、数例誤りとされる字形も見える。
60	失					○	大徐本の六書は「从手乙聲」である。 復古編の注目する字形差は、影宋本からは読み取れないので、本稿では元刊本の正誤判断規準を採る。元刊本が注目する字形差は、右下の図形部品「乙」の字形と思われる。「乙」の小篆  のように一度しか曲げないものを正しい字形とし、楷書のように 2 回曲げる字形を誤りとしたと推測される。王珏 2020 では聲相類に見える「秩」の字形を大徐本と比較して字形差を判断し ³² 、同じ規準を推測した。 海源閣本の単体字・複合字とも誤った字形となっているが、五音韻譜では単体字といくつかの複合字が正しいとされる字形である。
61	承					○	大徐本の六書は「从手从卩从収」である。 復古編の注目する字形差は、影宋本と元刊本で少し異なる。影宋本の判断規準は、①上段中央の部品が、六書に従って「卩」  とするか、「夕」  になっているか、また、②中央下段の「手」が小篆のように横画を 2 本とするか、楷書のように 3 本とするか、の 2 点と思われる。元刊本では、上段の部品だけに注目したものと思われ、中央下段の部品には明確な描き分けは無い。王珏 2020 では元刊本の状況には言及せず、②だけに注目している。海源閣本・五音韻譜には単体字しか無く、どちらも元刊本が誤りとして示す字形である。
62	梟			 影印 模写	 影印 模写	○	大徐本の六書は「从鳥頭在木上」である。 復古編が注目する字形差は、影宋本においては不明確である。「鳥」の最上部の開き方の微細な違いに注目しているように見えるが、明清時代の影宋本系列の模写本 ³³ では必ずしもこのように描き分けていない。元刊本は版木に割れがあり、印刷が擦れているため上段・中段の形状については議論ができないが ³⁴ 、「鳥」の脚の「匕」の有

³¹ 王珏2020は李陽冰の用例について言及しないが、周祖謨が言及している遷先塋記碑の「獻」での用例が、京大人文研の拓本データベースで確認できる (<http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/imgsrv/djvu/bei/toul1370x.djvu> 2行目、断裂部分の直後)。

³² 復古編の本編には「失」を含む文字が無いので、表2の項番60は復古編の母数が0となっている。

³³ 例として台湾国家図書館所蔵の索書號110.2 00983の旧抄本（三百堂の蔵書印があり、陳奥旧蔵と思われる）が誤りとして示す字形は、「鳥」の最上部には隙間が無く、1本の画線で描く。

³⁴ 元刊本が誤りとして示す字形に関しては、項番10「鳥」で誤りとして示した字形に従っている可能性がある。

						<p>無は明らかなので、本稿ではこれを採用。王珏 2020 も元刊本に従う。六書では「鳥」の下部を省略する根拠は無いため、楷書の「鳥」のように上段部品を略したものを誤りとしたと思われる。</p> <p>海源閣本・五音韻譜とも単体字は元刊本が正しいとする字形であるが、海源閣本では複合字となった場合に誤りとされる字形が混じることがある。</p>
63	卷				 影印 模写	○ <p>大徐本の六書は「从卩夨聲」である。</p> <p>復古編が注目する字形差は上段の部品が「米」か「采」という違いと思われる。「夨」の六書は「从卩采聲采古文辨字」であるので、「米」につくるものを誤りとしたと見られる。</p> <p>海源閣本・五音韻譜とも揺れは少ないが、海源閣本では「圈」において上段部品が口と一体化しているため、誤っているものに数えた。</p>
64	縣					○ <p>大徐本の六書は「从系持県」である。</p> <p>復古編が注目する字形差は、①「系」の字形が単体字と同様に作られているかどうか、また、②「県」の下段の部品が「丩」のように楷書化していないかどうか、の2点と思われる。</p> <p>海源閣本・五音韻譜でも復古編が誤りとする字形は見えない。</p> <p>王珏 2020 は、誤りとされる字形は秦漢代までの資料には見えないが、李陽冰の唐繙雲縣城隍廟記³⁵に見えることを指摘する。</p>
65	直					○ <p>大徐本の六書は「从乚从十从目」である。</p> <p>復古編は凶形部品「乚」が単体字の小篆と同様に終筆部を下に曲げるかに注目したと思われる。</p> <p>王珏 2020 で調査した陳昌治本では画線が太く</p> <p> のようにつくるため（一方「」は明確に曲げる）、説文は曲げないものと扱っている。</p> <p>本稿で調査した海源閣本では のように曲げがごく僅かであり（「植」 は全く曲げていない）、五音韻譜では のように明確である。</p> <p>このような微細な曲げは無く、 のように明確である。本稿では海源閣本での僅かな曲げでも正しい字形として数えたが、それでも両資料に見える正しい字形は半分以下である。</p>
66	广					× <p>大徐本の六書は「象對刺高屋之形」である。</p> <p>復古編は左側の画が上段から曲げて延ばしたものか、接触している別の画が連続しているかに注目したと思われる。しかし、大徐本の六書ではこれを判断するのは難しく、復古編は大徐本の単体字の字形に従い、楷書化したものを誤りとしたと思われる。</p> <p>海源閣本・五音韻譜とも全て復古編で正しいとされる字形である。</p> <p>王珏 2020 は、誤りとされる字形は先秦の文字資料には見えないが、碧落碑³⁶に見えることを指摘する。</p>

³⁵ 京大人文研の拓本データベースで存在が確認できる (http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/imgsrv/takuhon/type_a/html/tou1342x.html)、4行目。現存する碑は北宋末に復元されたものである（須江隆2010）。

³⁶ 京都大学人文科学研究所の拓本データベースで存在が確認できる (<http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db->

67	新					○	大徐本の六書は「从斤業聲」である。復古編が注目する字形差は、「業」の下が「木」か、「巾」かの違いと思われる。「業」の六書は「从木辛聲」であるため「木」につくるのが正しいと判断したと考えられる。海源閣本・五音韻譜の単体字は復古編で正しいとされる字形だが、海源閣本の場合は複合字においては誤りとされる字形が見える。王珏 2020 の調査によれば、誤りとされる字形は先秦期から広く用いられたもので、大徐本も巻 15 で李斯刻石は略された字形を用いることを書いているけれども、李陽冰は千字文で正しいとされる字形を用いている。
68	方					×	大徐本の六書は「象兩舟省總頭形」である。復古編が注目する字形差は、上部を楷書のように一に作る字形は誤りで、横画は全体を右下がり傾け、横画の左側を上曲げた字形を正しいとしたと思われる。大徐本の六書ではこの正誤判断をすることは難しく、大徐本の単体字に従い、楷書化した字形を誤りとしたと思われる。海源閣本・五音韻譜では全体は水平で左側を上曲げる字形が多く、これは正しいとした。また、項番 28 「舩」の左側図形部品のように横画の両側を上曲げているものは誤りとした。王珏 2020 の調査によれば、誤りとされる字形は先秦期から広く用いられたもので、嶧山刻石などにも見られるが、李陽冰は千字文や遷先塋記碑で正しいとされる字形を用いている。
69	矛					×	大徐本の六書は「(酋矛也建於兵車長二丈)象形」である。復古編が正しいとする字形は大徐本の単体字に従ったものと思われるが、六書ではこれの正誤を判断することは難しい。誤りとされる字形も「矛」を含む古文字形で用いられる図形部品(𠄎、𠄏など)である ³⁷ 。小篆の中でこれを使うのは誤りとしても、説文でこれを含むものが全て誤りとは言えない。この字形差に関しては本稿では対象を小篆に限り、古文で「矛」を含むものは対象外とした。海源閣本・五音韻譜は全て正しいとされる字形に従っている。王珏 2020 の調査では、誤りとされる字形は出土文字資料に多く、また唐写本説文解字木部残巻の「𠄎」が指摘される ³⁸ 。李陽冰は三墳記の「柔」で誤りとされる字形を用いる ³⁹ 。
70	伯					○	大徐本の六書は「从人白聲」である。復古編は、声符が「白」(六書は「从入合二二陰敷」)か、「𠄎」 ⁴⁰ (六書は「从鼻出與口相徐助也」)か、という違い

machine/imgsrv/takuhon/type_a/html/tou0494x.html)、17行目。左下に破損があるため、拓本データベースでは「宅」と隷定している。王珏2020は「庭」に模写した小篆字形を参照しているが、典拠は明らかでない。苗村治平が出版した模写本<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/780595/24>では「庀」に模写する。

³⁷ ただし、大徐本で「矛」の古文として掲出されるのは「𠄎」であり、ここで誤りとされた字形が古文の単体字としては掲出されるわけではない。また、小徐本は述古堂本も祁寯藻本も小篆と同じ「矛」を用いる。

³⁸ 木部残巻では「矛」を含む文字は「𠄎」しかないので、全てこの字形で統一していたかは不明である。

³⁹ 三墳記の用例は早稲田大学古典籍データベースの拓本貼込帖 (https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/chi06/chi06_01232/chi06_01232_p0012.jpg) で確認できる。

⁴⁰ 本稿では字形を区別する便宜上、大徐本の巻04上掲出の小篆を「𠄎」(康熙字典では「𠄎」)、巻07下掲出の小篆を「白」で指示したが、中華書局の陳昌治本などではどちらも「白」に対応づけている。小篆「𠄎」の説解は「此亦自字也省自者」であり、その反切も「自」と同じ疾二切である。

							に注目したものと思われる ⁴¹ 。説文において「𠂔」を含むとされる文字の楷書字形(皆、百など)は大半「白」に作るため混同し易いが、「白」の字音は旁陌切であるのに対し、「𠂔」の字音は疾二切で字音が異なる。「伯」の字音は博陌切であり、これと整合するためには前者を用いるべきで、字音が異なる後者を用いるものを誤りとしたと思われる。 海源閣本・五音韻譜の単体字は正しいとされる字形である。 王珏 2020 の調査では李陽冰が「𠂔」を用いた例は挙げられていない。
71	邑					○	大徐本の六書は「从口先王之制尊卑有大小从日」である。復古編が注目する字形差は、上段の図形部品が口腔の口かどうかと思われる ⁴² 。大徐本・小徐本とも明確には書かないが、前後の部首字の並び(員・貝・邑・颯)も口腔との関係は薄く、段注本が「口」に対して「音韋封域也」と注しているように、これは口腔とは無関係とするのが一般的であろう。六書に従い、口腔につくるものを誤りとしたと思われる。 海源閣本・五音韻譜とも全て正しいとされる字形である。
72	良					○	大徐本の六書は「从畱省亾聲」である。復古編が注目する字形差は下段の部品が「亾」(亡)か「匕」かの違いと思われる。本稿では、下段が「匕」であるものを誤りとする ⁴³ 。 王珏 2020 では誤りとされる字形は漢代以降の文字資料や碧落碑にいくつか見えること、ただし李陽冰は般若台題記では正しいとされる字形を用いていることを指摘する。 海源閣本・五音韻譜とも全て正しいとされる字形である。
73	紀					○	大徐本の六書は「从糸己聲」である。復古編が注目する字形差は「己」の終筆を右側で下ろすか、左側に戻してから右に払うかの違いと思われる。誤りとされる図形部品は「ㄣ」の小篆にも似るが、起筆部が水平であるので、起筆部が縦から入る「ㄣ」との混同は考えない。 海源閣本・五音韻譜とも正しいとされる字形である。王珏 2020 の調査でも、誤りとされる字形は漢代の私印に見えるが、一般性は無いとしており、李陽冰がこれを用いた例は挙げられていない。
74	專					○	大徐本の六書は「从寸夷聲」である。復古編が注目する字形差は上段の部品が「夷」か「甫」かと思われる。六書に従い、「甫」であるものを誤りとする。 海源閣本・五音韻譜とも全て正しいとされる字形につく

⁴¹ 王珏2020の出土文字資料調査は、この項について単体字の「白」を単体字「𠂔」に誤るかという観点で調査している。戦国期以降は「白」を意味する字形として「𠂔」を用いる例は少なくなり(『戦国文字編』p.222)、秦漢代から「白」を意味する字形として「𠂔」を用いる例が見えるようになったと思われる(『秦漢印章封泥文字編』p.312, p.682)。

⁴² 説解に見える「口」について、段注本の「音韋」に整合するのは口(クニガマエ)であるが、海源閣本・五音韻譜の説解では口・口の判別が困難であり、ここでは口腔の口で表記した。

⁴³ 王珏2020では、影宋本が正しいとする字形のように「L」右下を曲げないものは出土資料に見えるが、説文小篆は「L」の右下を下に曲げる字形であり、説文小篆の字形は出土文字資料には殆ど見えないとする。しかし、復古編元刊本が正しいとする字形は右下を曲げる字形であり、その一方、海源閣本や五音韻譜、また汲古閣本などは単体字では右下を曲げない字形である。これは、王珏2020は影宋本で字形差が不明な場合のみ元刊本の状況を確認し、また、説文小篆を陳昌治本のみによって確認したために得られた結論と思われる。右下の曲げに関しては項番46「甚」や項番65「直」も参照されたい。

						る。 王珏 2020 の調査では、秦漢代から誤りとされる字形も広く使われているが、李陽冰がこれを用いた例は報告されていない。
75	戰	戰	戰	戰	戰	○ 大徐本の六書は「从戈單聲」である。 復古編が注目する字形差は、「單」の上段の図形部品が口腔の口であるかどうかと思われる。「單」の説解は「从𠂔 田十𠂔亦聲闕」である。「田十」に関する説明が脱落したものと思われるが(小徐本で既に欠けているので、大徐本は当初から欠けていたと思われる)、上段の部品が「𠂔」であるとは言えるので、これに従ったものと思われる。 海源閣本・五音韻譜とも正しいとされる字形につくる。 王珏 2020 の調査では、先秦の文字資料では復古編が誤りとした字形のほうが広く使われており、正しいとされる字形は隸書の影響により発生したと考える ⁴⁴ 。しかし、李陽冰は正しいとされる字形を千字文で使っていることを指摘する。
76	豐	豐	豐	豐	豐	○ 大徐本の六書は「从豆象形」である。 復古編が注目する字形差は、上段部品を小篆の「山」のように作るか(中央の縦画が下で二股に分かれる)、楷書の「山」のように作るか(中央の縦画が1本)と思われる。復古編では小篆の「山」のように作るものを正しいとするが、「象形」としか情報が与えられないので判断が困難である。ただし、戴侗の六書故は唐本が「从豆从山𠂔丰丰聲」としていたと言うので、張有が唐本を参照できた可能性もあるだろう。 海源閣本・五音韻譜とも全て正しいとされる字形につくる。
77	主	主	主	主	主	○ 大徐本の六書は「从𠂔土象形从、亦聲」である。 復古編が注目する字形差は上部の図形部品が「、」なのか「一」かと思われる。大徐本の六書に従い、「、」を正しいとしたと考えられる。 海源閣本は全て、五音韻譜は1例(塢)を除き、正しいとされる字形につくる。
78	音	音	音	音	音	○ 大徐本の六書は「从、从否亦聲」である。 復古編が注目する字形差は部の図形部品が「、」なのか「一」なのかと思われる(項番 77「主」と同様)。大徐本の六書に従い、「、」を正しいとしたと考えられる。 海源閣本・五音韻譜とも単体字は正しいとされる字形につくる。海源閣本は誤りとされる字形に揺れる場合が少くない。

⁴⁴ 嶧山刻石でも誤りとされる字形を用いている。

上正下譌が正しいとする字形が大徐本の小篆と異なり、かつ、大徐本の六書によっても説明できないものは、項番39「宀」、項番52「亞」の2つ、また注目する字形差が不明なものは項番9「羽」の3つである。多くは大徐本の小篆か、あるいは大徐本の六書には従ったものである。

4.2 復古編・増修復古編・續復古編での上正下譌への準拠状況

表2は、表1を踏まえて宋刊大徐本・宋刊五音韻譜・復古編・増修復古編・續復古編がどの程度上正下譌に従うかを調査した結果である。表1で用いた資料に加え、増修復古編（汪啓淑旧蔵本、北京図書館珍本叢刊影印）、續復古編（趙宦光旧蔵本、北京図書館珍本叢刊影印）を用いた⁴⁵。

基本的には復古編影宋本での正誤判断を用いるが、表1で復古編元刊本を用いるとしたものについては表中の備考に記す。

⁴⁵ 調査はISO/IEC 10646の現代漢字のIdeographic Description Sequenceデータを表1の図形部品によって検索し、得られた現代漢字の中から説文小篆に対応づくものを絞り込むことで行った。これに用いたツールと調査手法の概要は鈴木2021b, 2021cを参照されたい。

表 2：上正下譌の宋刊大徐本・宋刊五音韻譜・復古編各種本編での準拠状況

- 「項番」は上正下譌の出現番号、表 1 と同じである。ただし参考情報として示す異なる正誤規準で判断した場合の結果には項番を付加しない。
- 「部品」は上正下譌が例示する小篆の図形部品を支持する現代漢字であり、表 1 と同じである。
- 「大徐本単体字」は大徐本の単体字の字形が上正下譌で正しいとされる字形と整合するかどうかを示す。整合する場合には「○」、誤りとされる字形である場合は「×」とする。
- 「大徐本」～「續復古編」の欄は、各資料での部品を含む小篆の数と、そのうち上正下譌で正しいとされる字形である場合の数である。図形部品を含む文字数が a 字、上正下譌で正しいとされる字形であるものが b 字である場合、b/a と表記している。
- 「種別」は大徐本と復古編の整合の状況の種別で、以下のように分類したものである。
 - A) 復古編(影宋本)、大徐本も、正しいとされる字形のほうが多い場合。
 - B) 復古編(影宋本)では正しいとされる形状で示されるものが多いが、大徐本では誤りとされる字形のほうが多い場合。
 - C) 復古編(影宋本)では誤りとされる形状で示されるものが多いが、大徐本では正しいとされる字形のほうが多い場合。
 - D) 復古編(影宋本)も大徐本も、誤りとされる字形のほうが多い場合。
 - E) 復古編には当該部品を含む小篆が見えないが、海源閣本は従う場合。
 - F) 復古編には当該部品を含む小篆が見えず、海源閣本も従わない場合。

項番	部品	大徐本 単体字	大徐本	五音韻譜 (宋刊)	復古編 (影宋)	復古編 (元刊)	増修 復古編	續復古編 (明写)	種別	備考
1	天	○	3/5	3/5	0/0	0/0	2/2	0/0	E	
2	毒	×	0/3	0/3	1/1	1/1	0/0	0/0	B	元刊本の字形差での判定
3	走	×	0/85	0/85	6/6	6/6	8/8	8/11	B	
4	歩	○	14/23	17/23	4/4	3/3	7/7	1/7	A	元刊本の歳の破損が大きく除外
	歩	○	6/11	10/11	2/2	2/2	4/4	1/3		歳, 僂, 僂などを除く場合 ⁴⁶ (参考)
5	乏	○	1/12	1/12	0/0	0/0	1/1	0/3	F	
6	章	○	17/17	17/17	2/2	2/2	5/5	4/4	A	影宋本の字形差での判定
	章	×	3/17	12/17	0/2	2/2	2/5	2/4		元刊本の字形差での判定(参考)
7	攸	○	114/127	124/128	11/14	14/14	21/21	25/27	A	海源閣本の熨の誤りが大きく除外
8	攸	×	2/9	2/9	3/3	3/3	2/2	2/2	B	
9	羽	?	?	?	?	?	?	?		字形差判断不能、表 1 参照
10	鳥	○	143/147	146/147	10/10	10/10	20/20	11/22	A	元刊本の字形差での判定
11	焉	○	6/6	6/6	0/0	0/0	0/1	2/2	E	
12	畢	×	1/12	0/12	5/5	5/5	5/5	0/0	B	
13	争	×	7/13	12/13	0/0	0/0	0/0	1/1	E	
14	自	○	112/136	119/136	14/19	19/19	28/28	24/25	A	
15	耒	○	14/15	15/15	1/1	1/1	6/6	4/4	A	
16	乃	○	5/11	5/11	1/1	1/1	0/0	3/3	B	

⁴⁶ たとえば「歳」の六書は「从步戌聲」で歩部に排されるので、王珏2020でも「歳」を図形部品「歩」を含む例と扱う (p.240)。しかし、上正下譌は「今」(項番20)と「金」(項番49)を分けていることから、小篆字形では含んでいても楷書でそれが見えない場合は別項目としている可能性がある。

17	可	○	48/48	48/48	3/3	2/3	5/5	5/8	A	
18	豆	○	65/66	65/66	11/11	11/11	7/7	6/6	A	
19	井	○	9/14	11/14	1/1	1/1	1/2	2/3	A	
20	今	○	6/47	1/47	6/7	7/7	12/12	6/7	B	
21	高	○	22/22	22/22	2/2	2/2	5/5	6/6	A	
22	京	○	25/25	25/25	5/5	5/5	4/4	8/8	A	
23	𠂔	×	0/3	0/3	0/0	0/0	0/0	0/0	F	
24	𠂔	×	0/27	0/27	4/4	4/4	0/5	4/4	B	
25	出	○	49/62	56/62	3/3	2/3	7/7	20/20	A	
26	𠂔	×	0/10	0/10	5/5	5/5	0/7	3/3	B	
27	舍	○	4/5	5/5	1/1	1/1	0/0	1/1	A	元刊本の字形差での判定
28	𠂔	○	40/40	40/40	2/2	2/2	5/6	8/8	A	
29	甬	○	11/13	12/13	3/3	3/3	4/4	2/2	A	
30	𠂔	○	14/18	15/18	0/0	0/0	1/1	2/2	E	
31	𠂔	○	6/7	6/7	2/2	2/2	2/2	1/1	A	
32	戎	○	3/3	3/3	1/1	1/1	1/1	1/1	A	
33	衆	○	2/4	2/4	0/1	0/1	1/1	1/1	D	
34	交	○	22/23	23/23	3/3	3/3	3/3	7/7	A	
35	老	○	7/8	8/8	1/1	1/1	2/2	4/4	A	
36	石	○	75/76	76/76	2/9	9/9	0/12	24/24	C	
37	而	○	61/61	61/61	9/9	9/9	10/10	12/12	A	
38	吳	○	6/7	5/6	2/2	2/2	2/3	2/2	A	海源閣本は「誤」を重出している
39	亢	×	11/19	4/19	4/4	4/4	4/4	2/3	A	
40	𠂔	○	54/57	57/58	8/8	6/9	12/12	17/17	A	海源閣本の臆は「田」に誤写しているため、除外
41	云	○	17/17	17/17	2/2	2/2	3/3	1/1	A	
42	非	○	42/44	43/44	4/9	9/9	10/10	8/8	C	
43	𠂔	×	0/2	0/2	1/1	1/1	0/0	0/0	B	
44	𠂔	×	0/28	0/28	5/5	5/5	6/6	2/2	B	影宋本での字形差の判定
45	𠂔	×	5/35	9/35	0/4	1/4	0/7	0/8	D	
46	甚	×	8/17	13/17	2/2	0/2	3/3	4/4	B	
47	𠂔	○	1/1	1/1	0/0	0/0	0/0	0/0	E	元刊本での字形差の判定 複合字なし
48	堇	○	13/19	16/19	1/1	1/1	0/2	2/6	A	元刊本の字形差での判定
	堇	×	3/19	9/19	1/1	1/1	2/2	6/6		影宋本での字形差の判定(参考)
49	金	×	4/237	3/240	30/30	30/30	34/34	44/46	B	海源閣本の鉞、釧、鋌は完全に楷書 となっているので除外

50	斗	○	15/18	17/18	0/3	3/3	6/6	7/7	C	
51	𡗗	○	5/6	5/6	0/2	2/2	2/2	0/0	C	參、齊を除き、壘を含む
	𡗗	×	20/22	18/21	3/3	1/3	0/2	0/6		(参考)五音韻譜の𡗗が破損、除外
	參	○	13/14	13/14	0/1	1/1	1/1	1/3		(参考)海源閣本の參が破損、除外
52	亞	×	6/8	6/8	2/2	2/2	1/1	1/1	A	
53	五	○	21/21	21/21	1/1	1/1	1/1	3/3	A	
54	𡗗	○	1/2	2/2	0/0	0/0	0/0	1/1	F	
55	酉	○	109/128	106/128	16/16	16/16	23/23	18/20	A	
56	𡗗	×	18/20	22/23	3/3	3/3	7/7	5/5	A	海源閣本の𡗗(破損)、𡗗(破損)、𡗗(𡗗に誤る)の3字を除外
57	足	○	114/115	114/115	17/17	17/17	14/16	19/20	A	
58	鐵	○	11/12	11/12	3/3	3/3	4/4	3/3	A	
59	鬲	○	50/53	49/53	6/6	6/6	11/11	9/9	A	
60	失	×	0/22	7/22	0/0	0/0	1/1	4/4	F	元刊本の字形差での判定
61	承	×	0/1	0/1	0/0	0/0	1/1	1/1	F	元刊本の字形差での判定 複合字なし
62	梟	○	2/3	3/3	0/0	0/0	0/0	0/0	E	元刊本の字形差での判定
63	卷	○	7/8	8/8	3/3	3/3	3/3	2/2	A	
64	縣	○	2/2	2/2	1/1	1/1	1/1	0/0	A	
65	直	○	3/10	4/10	0/0	0/0	0/0	0/1	F	
66	𡗗	○	119/119	119/119	13/13	13/13	26/26	18/18	A	𡗗は𡗗に従うと扱い、除外
67	新	○	1/2	1/2	0/0	0/0	0/0	0/0	F	
68	方	○	70/78	76/78	7/7	7/7	6/6	13/14	A	
69	矛	○	65/65	65/65	6/6	6/6	7/7	6/6	A	
70	伯	○	1/1	1/1	0/0	0/0	0/0	0/0	E	複合字なし
71	邑	○	190/190	189/189	12/14	14/14	22/23	26/26	A	五音韻譜で郵を破損のため除外
72	良	○	19/19	19/19	1/1	1/1	3/3	4/4	A	
73	紀	○	1/1	1/1	0/0	0/0	0/0	0/0	E	複合字なし
74	專	○	15/15	15/15	1/1	1/1	1/1	5/5	A	
75	戰	○	1/1	1/1	0/0	0/0	0/0	0/0	E	複合字なし
76	豐	○	5/5	5/5	1/1	1/1	1/1	2/2	A	
77	主	○	9/9	8/9	2/2	2/2	2/2	3/3	A	
78	音	○	12/20	18/20	2/2	2/2	4/4	3/4	A	

5. 小結

表2の種別を数えると

- A) 大徐本も復古編本編も従う
43項 (種別A-Dのうち70%)
- B) 大徐本は従わない
12項 (種別A-Dのうち20%)
- C) 復古編本編は従わない
4項 (種別A-Dのうち7%)
- D) 大徐本も復古編本編も従わない
2項 (種別A-Dのうち3%)
- E) 大徐本は従うが復古編本編は含まず
9項
- F) 大徐本は従わず復古編本編も含まず
7項

となる。大徐本と復古編本編の対比が可能な種別A-Dに限れば、各種別の割合はA70%、B20%、C7%、D3%となる。多くの正誤判定は大徐本と整合していると言えるだろう。4.1節で、正しいとする字形が大徐本と異なり、かつ、六書に字形の根拠を求めることができないものは3例であったことを考えると、Bの大半も復古編は大徐本の字形に従わないのであって、六書には従っていると言えるだろう。

5.1 種別Aについて

種別Aは基本的には上正下譌が大徐本字形を正とし、復古編本編も上正下譌に実際に従っているものである。種別Aは増補作業において単に大徐本から採集しても大きな問題は無いように思われるが、表3に示すように、續復古編の「歩」(項番4)、「鳥」(項番10)の多く、増修復古編・續復古編の「堇」(項番48)の多くは大徐本にも復古編にも従わない例が見られた。

續復古編の「歩」は上正下譌が誤りとする字形が大半である。また「鳥」においては、上正下譌が誤りとする字形そのものも見えるが(鷺がそれである)、それよりもさらに誤ったような字形が多い。鳩の字形に見えるように、上部の「白」を「自」に作るような字形である。この字形は、趙

宦光旧蔵本でも陸心源旧蔵本でも見えるので、底本に由来すると思われる。増修復古編では「歩」「鳥」に関しては正しいとされる字形である。

「堇」においては、増修復古編も續復古編も中段の部品を「口」に作るものが混じる。

表 3：種別Aにおいて増修復古編や
續復古編が上正下譌に従わない例

部品	増修復古編		續復古編	
歩 (項番 4)				
鳥 (項番 10)				
堇 (項番 48)				

5.2 種別Bについて

種別Bは、復古編本編は上正下譌に従うが、大徐本は従わないものである。対象字数の多い「走」(項番3)、「畢」(項番12)、「金」(項番49)などの状況から、復古編の正誤判断規準はある程度増補本に引き継がれていると言える。

表 4：種別Bにおいて増修復古編が
上正下譌に従わない例

部品	増修復古編		續復古編	
夂 (項番 24)				
夂 (項番 26)				

ただし、表4に示すように、増修復古編は「夂」(項番24)、「夂」(項番26)は上正下譌に従わず、大徐本に従ったように見える。一方、續復古編ではこれらは上正下譌が正しいとする字形に従っており、復古編との併用を想定していた可能性を補強する。

5.3 種別Cについて

種別Cは4項しかないが、このうち「石」(項番

36)、「非」(項番42)、「斗」(項番50)は、影宋本は本編が上正下譌の正誤規準に準拠していない。しかし、元刊本と續復古編は準拠している。増修復古編はこのうち「非」「斗」は準拠しているが、「石」は準拠しておらず、種別Bの状況、また増修復古編は元刊本を参照したと思われること(鈴木2021a)を考え併せると増修復古編は独自の正誤規準を持つと思われる。

また、「亼」(項番51)の規準は「𠂔」を含めた場合、どれも準拠できていない⁴⁷。これは「𠂔(齊)」を含む小篆の多くが、しばしば縦画を付加するためだが、図形部品「𠂔」にも揺れがあることから、「𠂔」の上段部品を「亼」と共用化するものと、楷書字形の「齊」の影響を受けたものの混在が疑われる⁴⁸。

5.4 今後の課題

本稿は復古編の上正下譌の正誤規準が増補本でどの程度適用されているかの調査報告に留まる。増修復古編や續復古編の特有の部分を議論するには増補された文字の選定基準や説解についての調査が必要である。

また、復古編そのものに関しても、種別Cの4項のうち少なくとも3項は復古編の影宋本と元刊本で状況が違うという結果を得たが、その数が少ないこともあり、このようになる背景について議論はできていない⁴⁹。今後の課題としたい。

謝辞

本稿は科研費課題番号16K004600A, 19K12716

⁴⁷ ただし王珏2020の判断(脚注24、「𠂔」は含めないが「𠂔」は含める)で評価すれば、増修復古編は準拠している。

⁴⁸ 『戦国文字編』(p.475)、『秦漢印章封泥文字編』(p.604)を見る限り「亼」を含む字形も隷変以前からあり、海源閣本にも見えるが、五音韻譜には見えない。

⁴⁹ もととの宋刊本は準拠していたが、影宋本が伝抄の過程で誤った可能性と、元刊本が彫版に際して整理した可能性が考えられるが、この3例だけで議論するのは早計であろう。

の成果を含みます。本稿の執筆にあたり、高橋由利子先生、大西克也先生、邱永祺先生、董婧宸先生、陳信良先生、守岡知彦先生、山本堯先生に有益な議論を頂きました。皆様に深く感謝いたします。

参考文献

- 許慎:『説文解字』, 北京國家圖書館所藏南宋元修本影印, 國學基本典籍叢刊, 國家圖書館出版社, 2017, ISBN 9787501360253
- 許慎:『説文解字』, 淮南書局翻刻汲古閣四次様本, 京都大學人文科學研究所所蔵, <http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/toho/html/A024menu.html> (2021-06-13 閲覽)
- 李燾:『宋板重刊説文解字五音韻譜』, 中國書店, 2012, ISBN 9787514904192
- 張有:『復古編』, 黃丕烈旧蔵影宋写本, 四部叢刊三編
- 張有:『復古編』, 北京國家圖書館所蔵好古齋元刊本, 中華再造善本, 北京圖書館出版社, 2004, ISBN 7501325472
- 吾丘衍:『學古編』, 早稻田大學所蔵 堺屋新兵衛刊本, 請求記号 チ06 00027, https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/chi06/chi06_00027/ (2021-06-13 閲覽)
- 張有・吳均:『増修復古編』, 北京國家圖書館所蔵 明刊・繆荃孫跋本, 善本書號 7331
- 張有・吳均:『増修復古編』, 北京國家圖書館所蔵 明刊・汪士鐘旧蔵本, 善本書號 7332, 北京圖書館古籍珍本叢刊5卷, ISBN 7501307032
- 張有・吳均:『増修復古編』, 臺灣國家圖書館所蔵 清・吳騫旧蔵写本, 登録號 rarecatx0223446
- 曹本:『續復古編』, 北京國家圖書館所蔵 明・趙宦光旧蔵明写本, 善本書號7978, 北京圖書館古籍珍本叢刊5卷, ISBN 7501307032
- 曹本:『續復古編』, 臺灣國家圖書館所蔵 清・阮元旧蔵写本, 登録號 rb0002212
- 曹本:『續復古編』, 北京國家圖書館所蔵 清・姚覲元校本, 善本書號 02128
- 曹本:『續復古編』, 清・姚覲元翻刻本, 續修四庫全書, 經部237冊, ISBN 7532524604
- 尹雙(2008):『《續復古編》研究』, 浙江大學人文學院碩

- 士論文, 2008
- 王輝・周豔茹 (2019): 「說涵芬樓影印宋版《說文解字》對原本的改動及依據」, 山東大學中文學報, 2019(02), ISBN 9787209118040, <http://www.gwz.fudan.edu.cn/Web/Show/4481> (2021-10-14閲覧)
- 王珏 (2013): 「宋代《復古編》“規範”小篆字形“走”對元明清篆書的影響」, 文化學刊, 2013(06), pp.159-163
- 王珏 (2020): 『北宋張有《復古編》研究』, 中國社會科學出版社, 2020, ISBN 9787520372626
- 金美鈴 (2014): 「中古石刻篆文研究」, 2014, 華東師範大學碩士論文
- 黃建榮 (2001): 「王安石《字說》說解字義的特点和以“會意”說解字義的原因」, 撫州師專學報. 2001(02), pp.64-69
- 胡樸安 (1937): 『中國文字學史』, 商務印書館, 1937
- 周祖謨 (1966): 『問學集』, 中華書局, 1966
- 朱生玉、胡惠 (2020): 「曹本《續復古編》概說」, 寧波大學學報 (人文科學版), 2020-03-10, Vol. 33, No. 2, pp.94-99
- 須江隆 (2010): 「修復された碑文「唐縉雲縣城隍廟記」」, 立命館文學 (619), 2010-12, pp.438-452
- 鈴木俊哉 (2021a): 「北宋『復古編』の元代の増補2種の文字集合の違いについて」, 情処研報 (DC), 2021-DC-121(6), pp.1-6 (2021-07-08)
- 鈴木俊哉 (2021b): 「小篆の図形部品の不統一性から見る字書資料の参照関係」, 情処研報 (CH), 2021-CH-127(3), pp.1-5 (2021-08-21)
- 鈴木俊哉 (2021c): 「說文小篆字形差確認のためのツール試作と復古編の上正下譌の調査」, じんもんこん 2021論文集, 印刷中
- 陳侶佐 (2019): 「宋代における「古文篆書」」, 書学書道史研究 2019(29), pp.15-30,106-105, doi 10.11166/shogakushodoshi.2019.15
- 陳侶佐 (2020): 「宋代における篆書發展の背景について」, 大東文化大学大学院書道学専攻院生会誌 (17), pp.31-46, 2020-03-31, <http://opac.daito.ac.jp/repository/daito/53040/> (2021-06-13閲覧)
- 邱永祺 (2011): 「張有《復古編》総合研究」, 臺北市立教育大學碩士論文, 2011, <https://hdl.handle.net/11296/538zcm>
- 董婧宸 (2019): 「宋元遞修小字本《說文解字》版本考述——兼考元代西湖書院的兩次版片修補」, 勵耘語言學刊, 2019(01), pp.80-105, doi 10.13554/b.cnki.liyunyuyan.2019.01.008
- 福田哲之 (2003): 「唐写本『說文解字』口部斷簡論考」, 書学書道史研究 2003(13), pp.43-53, doi 10.11166/shogakushodoshi1991.2003.43